

『聖地に見るキリスト教の広さ』 牧師 柏 明史

3月20日から28日まで、聖地旅行に行ってきました。清水ヶ丘教会員16名に他教会の会員6名を加えて、総勢23名で訪問しました。旅行を通して頂いた恵みはあまりにも大きくて、とてもこの誌面では語り尽くせません。これから機会を見て少しずつ分かち合っていきたいと思います。

今回の聖地旅行で強く思わされたことがあります。それは、キリスト教の広さです。私たちは、自分たちが属している日本のプロテスタント教会だけをキリスト教の世界であると無意識に思い込んでいます。礼拝の形式も、私たちが毎聖日ささげている礼拝形式が標準的なものであると思っています。しかし、今回聖地を訪れて、自分が捕えていたキリスト教の世界は何と狭かったのか、ということ思い知らされました。

イスラエル各地に見られる記念教会。そのほとんどがカトリック教会かギリシア正教会(あるいはロシア正教会)によって立てられたものでした。中には、アルメニア正教会によって立てられた教会もありました。当然、教会堂の中には、主イエスや聖母マリアの像や様々なイコンが飾られていました。また、ローソクの火が随所にささげられていました。そのような教会を次々に訪問しました。

初めの内は、少なからぬ違和感を覚えていましたが、次第にそれらの教会が持つ歴史の重さに圧倒されていきました。キリスト教二千年の歴史は、まさにこのような教会の歴史なのであって、プロテスタント教会の歴史は僅か500年にも満たないことを肌で感じました。

そういう中で「園の墓」というところは珍しくプロテスタント教会が管理している施設でした。この「園の墓」を発見したのは、チャールズ・ゴードンという英国人です。最近知らされたのですが、このチャールズ・ゴードン氏は、清水ヶ丘教会の初代牧師倉持芳雄先生の恩師であるバクストン宣教師の従兄なのだそうです。倉持先生の恩師の従兄が、この「園の墓」を発見したということを知って、この場所がぐっと身近に感じられるようになりました。今回、雨上がりの「園の墓」で礼拝をささげられたことも忘れられない思い出になりました。

聖地を訪れる人たちも実に多様でした。カトリック教徒、正教会の信徒、その他どこの教会か分からないような人たちもいました。それらの人たちが、皆、同じ場所に、同じ目

的をもって集まって来ていました。そのような多様性の極みが、主イエスが十字架を背負って歩かれたという「悲しみの道(ヴィア・ドロサ)」の終点である聖墳墓教会でした。この教会はカトリック教会、ギリシア正教会、アルメニア正教会の他、シリア、エチオピア、コプトの正教会によって区割分離がなされています。ゆっくり立ち止まることも出来ないほどの混雑の中で、床に口づけし、涙を流している人も多くいました。

そういう人たちを見ると、宗教改革の「聖書のみ、信仰のみ」の教理に立つ私たちとの違いを思わされます。しかし、同時に、目に見える「しるし」に口づけし、涙を流す人たちの信仰にも、尊いものを感じました。私たちプロテスタントの信仰に欠けているものを見させて頂いた思いがしました。プロテスタントの信仰は、ともすると頭でっかちになりがちです。しかし、その人たちは、「ここで、まさにこの場所で、主イエスが私たちの罪のために十字架に架かってくださり、その肉を裂き、血を流してくださり、ここに葬られた」、ということ素直に信じ、そのことに胸を貫かれる思いを抱いているのです。それ故に、涙を流しているのです。このような信仰というのは、意外に強いのではないか。そのように思わされました。

もう一つ、聖地には世界中からキリスト者が集まって来ます。色々な言葉が飛び交います。驚いたのは、中国人キリスト者が多かったことです。また、インドネシアの教会のグループもいました。一昔前なら見られなかった人たちであると思います。それぞれの国の人たちが、それぞれの国の言葉で讃美歌を歌っていました。

その光景に、天国の予型を見たような思いがしました。天国では、様々な国の、様々な教会の人たちが、皆、一堂に集まって、それぞれの言葉で主を賛美するのではないのでしょうか。そして、それを主は喜んで受け入れてくださるに違いない。そのように感じました。天国に行った時、主イエスは「あなたはどこの教派の、何と言う教会の信徒ですか」、などとは決してお尋ねにならないだろう。天国においては、全ての教会は一つの神の家族となるに違いない。そのような幸いな思いに導かれました。